2019年度(令和元年度)　草津市立新堂中学校通信　　Ｎｏ６（１０月１０日号）

しんどう中学校通信

～仲間とともに高めあい　豊かな学びと心を大切にする学校～

子育てについて　～辻井いつ子さんのお話から～

先月の話になりますが、９月２３日（祝）に草津クレアホールで「いのち・愛・人権のつどい」があり、私は、辻井いつ子さん（ピアニスト：辻井伸行さんの母）の講演を聞く機会に恵まれました。

辻井伸行さんと言えばプロのピアニストとして有名で、ご存じの方も多いと思います。その母親である辻井いつ子さんは長男の伸行さんが生後まもなく全盲であることがわかり絶望と不安の中で、なにもかも手探りの状態で子育てをスタートされたことをお話されました。

伸行さんが幼児の頃、ショパンの曲がかかるといつも喜んでいる様子をみて、おもちゃのピアノを買ってあげたこと、ジングルベルの曲を聞いて即興でそのおもちゃのピアノを弾いたことなどのエピソードを語られました。「あれもこれも出来るというわけではないので、出来ることを伸ばしてあげたい」「ピアノが彼を明るい場所に連れていってくれた」と言う言葉がたいへん印象に残っています。

少し目をつぶってみるとすぐにわかることですが、ピアノを弾こうとすると最初に指を置きたい鍵盤の位置がまずわからない、曲の流れの中で少し離れた場所の鍵盤へ指を移動しようものなら、その位置を確認することすら難しい…。辻井さん自身も息子にピアノを習わせることになった時には、周りの人から楽器であるならなぜ琴かバイオリンにしないのかと言われたことを紹介されていました。

「親として子どもに何ができるのか」辻井さんのお話を聞いてから「子育て」と言うことについて、私自身も考えさせられました。辻井さんが「この子は本当にしあわせになれるのかな」と思ったという言葉は“背負っているものの大きさ”を感じるには十分すぎる言葉です。

では、子どもが目の前の「壁」を乗り越えようとする力はどこから生まれてくるのでしょうか？

当たり前のことですが子どもにとって「一番近くにいる大人」は親です。結局その子のことを一番知っている親が、その子の様子や表情・変化をよく見て愛情を注いであげることであり（辻井さんがそうであったように）子どもにとっては、その親が一番のサポーターであることが大切なのかなと思いました。

子どもも親には無条件に受け入れられたいと思っているのではないかと思います。共感してくれる人、自分の良さや頑張りを認めてくれる人（中学生になれば、決して褒めてくれることばかりを求めているのではないと思います）そんな人が近くにいてくれたなら、子どもは苦しみや辛さに立ち向かえる力を蓄えられるように思います。

“近くにいる人にしかかけられない言葉”というものがあると私は思っています。新堂中学校の先生方もその子どもにとって「近くにいて安心して心を開くことが出来る大人」でありたいと願っています。

校長　　伊庭　靖二

新中祭・文化の部の様子から　…9月19日（木）

新中祭のテーマ「新中祭　夢への第０話　～史上最高の青春を～」が紹介され、全校制作物であるモザイク壁画が体育館の壁面に飾られました。午前中に文化部の発表や青少年の主張作文の発表が行われ、午後からは、合唱コンクールと東日本大震災で被災された青田恵子さんの講演会と「群青」の全校合唱が行われました。

新中祭・体育の部の様子から　…9月26日（木）

天候にも恵まれ秋晴れの下に、第４０回新中祭・体育の部が開催されました。昨年、台風等の影響で順延し、当日も降雨のため閉会式もできなかったということもあったのですが、今年は晴天のもとでたいへん盛り上がり、気持ちの良い大会であったと思っています。朝早くから、たくさんの保護者の皆さんにも来校いただき感謝しています。ありがとうございました。